

ベートヴェンのトリルの研究 (2)

高橋 功 宜*

(1986年6月30日受理)

目 次

1. はじめに
 2. ベートーヴェンのピアノ・ソナタ
 3. 第1番 へ短調 op. 2 No. 1
 4. 第3番 ハ短調 op. 2 No. 3
 5. 第5番 ハ短調 op. 10 No. 1
 6. 第6番 へ長調 op. 10 No. 2
 7. 第7番 ニ長調 op. 10 No. 3
 8. 第8番 ハ短調 op. 13
 9. 第13番 変ホ長調 op. 27 No. 1
 10. 第14番 嬰ハ短調 op. 27 No. 2
 11. 第16番 ト長調 op. 31 No. 1
 12. 第18番 変ホ長調 op. 31 No. 3
 13. 第21番 ハ長調 op. 53
- 以上は、第45巻第1号 (1985. 10) に掲載。以下は、本号

目 次

1. 第22番 へ長調 op. 54
2. 第23番 へ短調 op. 57 <<熱情>>
3. 第24番 嬰へ長調 op. 78
4. 第26番 変ホ長調 op. 81a
5. 第28番 イ長調 op. 101
6. 第29番 変ロ長調 op. 106 <<ハンマークラヴィーア>>

— 注 意 —

1. 作品例についての楽譜はヘンレ版による。
2. 楽章はローマ数字を以て示す。例えば、— II —
3. 小節番号はアラビア数字を以て記す。例えば、(5) 例えば、⑤
4. 奏法例についてはアラビア数字を以て記す。例えば、5

第22番 へ長調 op. 54

作曲年1804 献呈——

「ヴァルトシュタイン」と「アパショナータ」の2つの間に介在するこのソナタは、その内容が平凡であり演奏会でとり上げられることのない作品である。全体が2楽章構成でしかも明確な形式に欠けている。

— I —

4分の3拍子。自由な形式でソナタ形式ともロンド形式ともつかぬ作品、従ってはっきりした主張を感ずることが出来ない。最後は第1主題のコーダで結んでいる。

例. 1

(133~135)

連続したトリルの後に、Adagioの部分から第1主題によるコーダに結ばれている。

奏法

① クロイツァーによる奏法

② クロイツァー豊子による奏法

1) Budapest は次のようになっている。

(133)

2. 記譜

奏法

(135)

記譜

奏法

133小節の最後に後打音を使用していないが、この場合は後打音を奏すべきである。

③ Schuster による奏法

(135)

3.

mezzo voce (molto piano) *pp* *ppp* *dolce* etc.

(136)

4.

133小節最後の部分を、6連音符と5連音符の2つの奏法を示しているが、後打音を奏する意味において、6連音符の奏法がよいと考える。

④ Schirmer による奏法

(136)

5.

1. *ritardando molto* *3.* *4.* *5.* *6.* *ten.* *a tempo* *dimin.*

6.

2. *in tempo* *6.* *

⑤ トーヴィによる奏法

トーヴィは135小節について次のように述べている。

「トリルは、ここに書いてあるように、フェルマータの間つづけなければならない。6連音符の音階はそれについですぐ始まる。Adagioにするのは、ベートーヴェンがそう書いたところだけで、その前は Adagio でないこと、またはじめのフェルマータは3連音符全体にかか

るが、後のフェルマータは最後の音だけにかかることに注意しなければならない。²⁾として
いる。しかし、この部分はトリルなしで奏する何れの方法をとっても良いと考える。

以上のことを考慮し、例1の奏法について次のように考える。

133小節, Cis 音より開始し, 後打音の後, 次のトリルに移る。

134小節, D音より開始し, 後打音を以て次のトリルに移る。

135小節, H音より開始する。

— II —

4分の2拍子。明確な形式に欠くが、全体が3つの部分から構成され、3部形式と見ることが出来る。コーダは全く主題だけを扱い、*ff*によって力強く終わっている。

例. 2 (160~161)

第3部にトリルを使用し、*più Allegro*によって、主題によるコーダに進行する。

奏法

主要音のB音より開始し、後打音によって終る。16分音符によるトリル。

(160)

7. 記譜

奏法

第23番 へ短調 op. 57 《熱情》

作曲年1804~05 献呈 フランツ・フォン・ブルンスヴィック伯爵⁴⁾

この作品は、ベートヴェンの中期的大傑作「熱情ソナタ」Sonata appassionata として知られている。この「熱情」の名称は、ベートーヴェン自身によるものではなく、ハンブルク出版社のクラッツ August Heinz Cranzによって付けられている。音楽的構成は循環の方法をとり、全楽章が有機的に展開し、実に素晴らしい効果をあげている。

2) ベートーヴェン ピアノ・ソナタ集Ⅱ. トーヴィ 注解 山根銀二 p.243

3) 後打音を付しているもの。Budapest, Durand, Universal, C. F. Peters, (但し, () になっている。) K. R. Peters, 後打音を付していないもの。Schuster, Ricordi, Schirmer, 全音 The Associated Board of the Royal Schools of Music.

4) テレゼ・フォン・ブルンスヴィックの弟で、チェロを弾く音楽愛好家 名曲事典 音楽之友社 p.267

— I —

8分の12拍子。ソナタ形式で書かれている。冒頭から、ユニゾンの特殊なリズムで開始され、しかもppによって心憎いほどの心理的な効果をだしている。

例. 3 (3~23)

(3)

Allegro assai

(11) (23)

5) 運指により上方補助音開始と考えられる版, K. R. Peters, C. F. Peters, Budapest, (奏法有) Henle, 21, 71, 73, 76, 138, 142, 156, 158, 160, 162の小節11に同じ。運指により下方補助音開始と考えられる版。

ソナタ形式、提示部の第1主題提示（1～16）および第1主題確保（17～24）に使用されている。また、この楽章は、8分の12拍子の珍しい拍子をとっている。

奏法

① トーヴィによる奏法

トーヴィは、トリルの奏法について次のように述べている。

「トリルは上方の音符から弾き始めるというバッハの規則は、モーツアルトの時代にはほとんどすたれていた。その上方の音符がトリルの直前に弾かれる場合には、いつも規則的な例外が行なわれていた。その後の様式では、この偶発事項が起こらないどころではなく、前よりもしばしば起った。そのうえ、トリルが楽句の冒頭におかれたり、下方に幅ひろく飛躍して始まる場所では、主要音符から始まるならばずっと美しく聞こえるが、そうでないと、旋律線がぼやけてしまうのである。そこで、上方の音符から始めるトリルは、だんだん押しつけられて、ついに余り使われなくなってしまった。こうしてわれわれは、ほとんどそれに反対の規則に達するのである。しかし、よろめくような反復を避けるという全く同じ理由から、トリルの主要音符がすぐ前に弾かれる場合には、トリルは上方音符から始めるといいだろう、作曲家の表示法はどうあろうとも、彼は反復音を意味しないことを、いつも心にとめておくべきである⁶⁾。」と一般的な説明をし、更に作品57の1楽章についてトリル奏法を示している。「作品57では、ベートーヴェンは、しばしば装飾音符をトリルの下方に付け加えている。即ち、第3、7、9、23、144、146、小節がそれである。

次に、ベートーヴェンは、右手でトリルを支える和音を分け持たなければならない場合には、下方の装飾音は用いない。このような場合には、前後関係のために、トリルは上方の音符から弾き始めるのである。これは、第21、71、76、138、142、156小節に当てはまる。このようにして始まる先例が第11小節で装飾音を消し去ったことを説明するし、また、第158、160小節にも、右手は邪魔されてはいけなければならないけれども、やはり適用されるのである。また上方への緊張が固執されていることに一致しているのである。自筆原稿はこれらの装飾音符の有無については極めて明瞭で、第11小節には消し跡がある。そこでこの証拠に従って、装飾音の頭の音符を、トリルの上方の音符であろうと下方の装飾音符であろうと正確に拍の上で、その下に置かれている和音と一緒に打って弾くのである⁷⁾。」

② クロイツァーによる奏法

トリルの奏法について、次のように説明している。「初頭に小音符を以て開始音を指示していないトリルは、それに先行する主要旋律音の反復とならない音から始める。例えば、〈D〉を主要音とするトリルに8分音符の〈D〉があるとすれば、トリルは必ず上方補助音から始めなければならない⁸⁾。」と述べ、更に、クレプスによる「第1楽章におけるトリルの記号は非常に不規則で、或る場合は倚音を付してトリルの開始音を示し、又他の場合にはこれを欠いている。又後打音においても同様で、これを付した個所とこれを欠く個所とがまちまちになっており、各々の場合に、確固たる音楽的意義があるわけではない。故にこれらの有無は、演奏者が自己

Ricordi, 156, 158, 160の小節11に同じ。(但し、21, 71, 73, 76, 162の右手でトリルを支える和音を分け持つ小節は上方補助音開始としている。なお、138, 142の小節は運指だけの判断難。) 運指により主要音開始と考えられる版。Schuster, Universal, (但し、Universalの場合は、11, 71, 73, 158, 160, 162の小節に運指を示し、別に()による指使いが記入されている。従って、上方補助音開始も考えられることを示している。)

6) ベートーヴェン ピアノ・ソナタ集Ⅲ トーヴィ 注解 山根銀二訳 全音 p. 10

7) ベートーヴェン ピアノ・ソナタ集Ⅲ トーヴィ 注解 山根銀二訳 全音 p. 10

8) 装飾音 レオニード・クロイツァー著 中瀬古和訳 大化書房 p. 154

の趣味に従い、任意にすべきである⁹⁾。」との考えに対し次のように反論している。

「しかし、これは過言である。勿論我々は、かたちにはまった解釈は避けなければならないが、如何に不規則といえども、ベートーヴェンの指示に従い、またトリルの開始についての原則をはっきりと念頭に置くべきである¹⁰⁾。」と、何れにしろ十分な検討が必要である。

③ クロイツァー豊子による奏法

原則的に倚音のない場合には、上方補助音開始の奏法をとっている。

8. 記譜 (3) (11)

奏法

7, 9も同じ。

21も同じ。

(23)

記譜

奏法

④ Schuster による奏法

3小節、下方補助音からの開始。

9. (3) (1 2)

11小節、上方補助音からの開始。

10. (3)

⑤ Schirmer による奏法

3小節、Schuster と同じく、下方補助音からの開始としている。

11小節、次のような奏法を示し、上方補助音からの開始を指示している。

11. (11)

⑥ Budapest による奏法

9) 装飾音 レオニード・クロイツァー著 中瀬古和訳 大化書房 p. 155

10) 装飾音 レオニード・クロイツァー著 中瀬古和訳 大化書房 p. 155

3小節, 3連音符による下方補助音の開始。

(3)



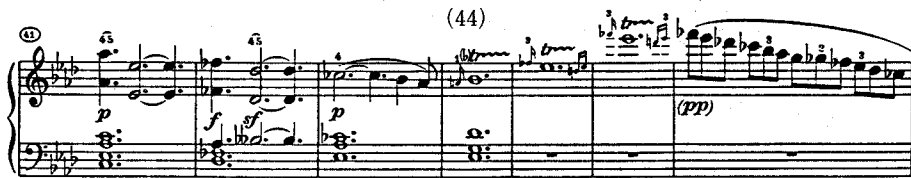
11小節, 3連音符による上方補助音の開始。

(11)



例. 4

(44~46)



第1主題確保の後, 推移の部分に使用されている。

奏法

① クロイツァー豊子による奏法

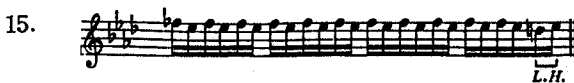
44小節, 下方補助音からの開始としている。

(44)



45小節, 上方補助音からの開始としている。

(45)



② Schuster による奏法

44小節, 下方補助音より開始し, 9連音符によるトリルとしている。

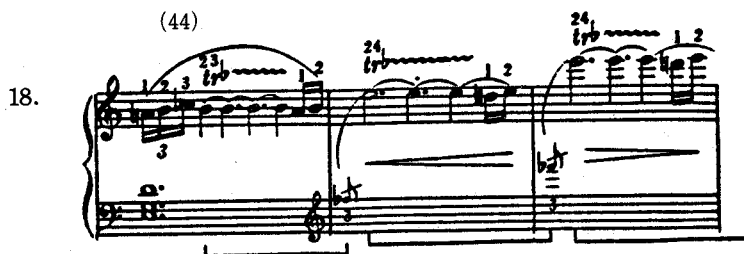
(44)



45小節，上方補助音からの開始。



③ Budapest による奏法



例. 5

(183~185)



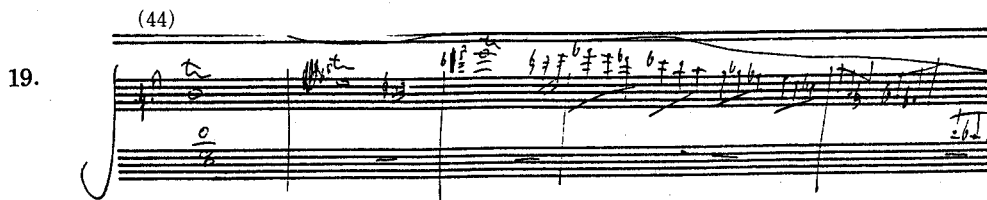
再現部，第1主題確保後の推移部分に使用されている。

奏法

提示部46小節に下方補助音が付されているが，再現部183小節においては，小音符が付されていない。従って，この個所は解釈において非常に問題の起るところである。

次に，自筆草稿ファクシミリと，初版本ファクシミリを示して見る。

自筆草稿ファクシミリ (提示部)



11) 小音符によって下方補助音開始を示している版。Ricordi, Schuster, Budapest, Henle, (但し，星印を付している。) 運指により上方補助音開始と考えられる版。C. F. Peters, Breitkopf,

初版本ファクシミリ (提示部)

20. (44)

自筆草稿ファクシミリ (再現部)

21. (183)

初版本ファクシミリ (再現部)

22. (183)

(ファクシミリは、属啓成盤修・音楽之友社による)

① Budapest による奏法

次に示す楽譜では、183小節、下方補助音の開始、184~185小節、上方補助音を示している。

23. (183)

Ossia:

以上の資料を検討した結果、次による奏法がよいと考える。

下方補助音による開始

旋律進行において、トリル音と前の音が同音となっているが、ベートーヴェンの指示に従い下方補助音の開始とする。

3, 7, 9, 23, 69, 144, 146の小節,

上方補助音による開始

トリル主要音と前の音が同音になっていることを考慮し、上方補助音の開始とする。

11, 21, 71, 73, 76, 138, 142, 156, 158, 160, 162の小節,

下方補助音による開始

ベートーヴェンの指示に従い下方補助音の開始とする。

44小節,

ベートーヴェンによる小音符の指示にはないが、提示部44小節と再現部 183 小節との関係を考え、下方補助音の開始とする。

183小節,

上方補助音による開始

ベートーヴェンの指示に従い上方補助音の開始とする。

45, 46, 184, 185の小節。

第24番 嬰へ長調 op. 78

作曲年1809 献呈 テレーゼ・フォン・ブルンスヴィック¹²⁾

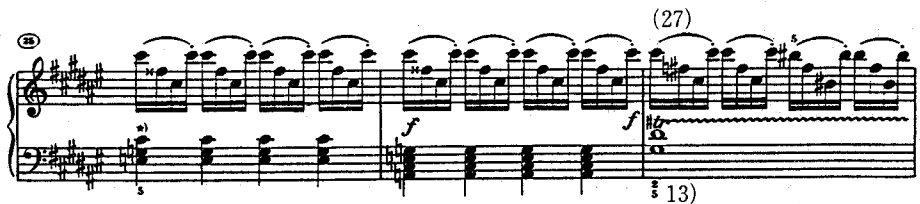
ピアノ・ソナタ op. 54「熱情」以来久しく手がつけられず、4年をへだてた1809年になってようやく作曲された。この曲は、2楽章から構成され、しかも規模も小さく、全体に細やかな表現がなされている。ベートーヴェン自身はこの曲を高く評価していたと伝えられている。

— I —

4分の2拍子、曲はまず Adagio cantabile の美しい序奏ではじまる。主部は4分の4拍子となり Allegro non troppo の優しい第1主題で開始され、全体が奥ゆかしく控えめな表現がなされている。

例. 6

(27)



12) テレーゼ・フォン・ブルンスヴィック伯爵令嬢、このソナタが有名であるのは、ひとつには同曲がテレーゼに捧呈されているからである。彼女はベートーヴェンの「永遠の愛人」の一人。ベートーヴェン ピアノ・ソナタ集Ⅲ 野村光一解説 春秋社 p.2

13) 運指により主要音開始と考えられる版。Schuster, Universal, Budapest, Henle, Durand, 運指により



ソナタ形式、提示部の第1主題確保後、それに続く推移の部分に使用されている。

奏法

クロイツァーは、次のように上方補助音の開始としている。

(27)



また、Schirmer, peters (Köhler=Ruthardt) も上方補助音の開始を指示している。しかし、ここでは主要音を主として考え、dis音の開始としたい。

例. 7

41



ソナタ形式、展開部に使用されている。

奏法

Breitkopf, K. R. peters では、上方補助音の開始としているが、ここでは主要音を主として考えD音の開始としたい。

第26番 変ホ長調 op. 81a¹⁵⁾

《告別》

作曲年1809~10 献呈 ルードルフ大公

上方補助音開始とされる版。K. R. Peters, Breitkopf, (小音符による指示)、後打音指示のある版。K. R. Peters, (但し、()による。) Schuster, (但し、()による。) Breitkopf, Budapest, C. F. Peters (但し、()による。) Universal (但し、()による。)

14) 運指による上方補助音開始と考えられる版。K. R. Peters, Breitkopf, 運指による主要音開始と考えられる版。Schuster, Budapest, Universal, Durand (但し、運指)は3指のみ()後打音の指示ある版。K. R. Peters, Budapest, ()による後打音の指示ある版。Schuster, Universal, Breitkopf, C. F. Peters.

15) ルドルフ大公との深い心のつながりから生まれ、大公にささげられたこのソナタは、奇妙な作品番号をもつ

第1楽章が告別 (Das Lebewohl.) 第2楽章が不在 (Die Abwesenheit.) 第3楽章が再会 (Das Wiedersehen.) と名づけられている。ピアノ・ソナタのうちで、ベートーヴェンによる標題は、op. 13の「悲愴」と、このop. 81a「告別」の2曲だけである。

— III —

8分の6拍子、ソナタ形式で書かれている。冒頭にfで属七の和音が鳴らされたのち、喜びと溢れるような生き生きとしたアルペジオで奏される。内容的に実に見事な作品である。

例. 8 (68)

(68)

16)

提示部、終止の部分に使用されている。

奏法

主要音のC音より開始し、後打音を以て終る。

第28番 イ長調 op. 101

作曲年1816 献呈 ドロテア・フォン・エルトマン男爵夫人¹⁷⁾

晩年の五大ピアノ・ソナタ。後期様式をそなえるこの作品は、全体が3楽章の構成をとり、表現手法がいろいろと工夫拡張され、和声的手法、多声的手法等を幅広く取り入れ、それぞれに特徴のある個性を持たせている。

— II —

Vivace alla Marcia による4分の4拍子。3部形式を使用しており、第1部と第3部では、付点リズムによる律動形に乗って展開されている。中間部はカノン手法によって静かに始まる。

ている。81aとは、bの存在を暗示した表示である。もちろんbは実在しているが、aと同じピアノ・ソナタでもないし、また重要な作品でもない。往復書簡 ベートーヴェンのピアノ・ソナタ 分折と演奏 園田高弘、諸井誠共著 音楽之友社 p.162~163 (作品81b 六重奏曲 変ホ長調 作曲年1795。

16) 運指により主要音開始と考えられる版。K. R. Peters, Schuster, Budapest, Durand, Universal, 後打音指示のある版。K. R. Peters, Budapest, C. F. Peters (但し、()による。) Breitkopf, (但し、()による。)

17) ベートーヴェンのピアノの門弟中最も才能あり、最も師を理解した一人。ベートーヴェンピアノ・ソナタ集Ⅲ 野村光一解説、春秋社 p.7

例・ 9

(76~78)

行進曲風な曲の中間部に、3小節にわたってトリルが使用されている。後打音なし。

奏法

Schirmer によれば次のような奏法になっている。

(76)

25.

しかし、主要音のF音より、16分音符で開始してよいと考える。

— III —

4分の2拍子、Mit einer Saite (一弦の意) の指示があり、感動的な序奏で開始される。最後の小節がカデンツァ風に取り扱われ、Nach und nach mehrere Saiten の指示があって、ペダルは除々にはずされていき、第1楽章の第1主題が回顧されたのち主部に突入する。

例・ 10

(28~32)

序奏と回想部分から、主部にはいる導入に、連続してトリルが使用され、効果をだしている。


奏法

- 18) 運指により主要音開始と考えられる版。K. R. Peters, Schuster, Budapest, Universal, Breitkopf, Henle (いずれの版にも後打音を付していない。)
- 19) 下方補助による開始。K. R. Peters, C. F. Peters, Schuster, Budapest, Durand, Universal, Henle, Breitkopf. 上方補助音開始, Schirmer, 以上のいずれの版も後打音を付していない。

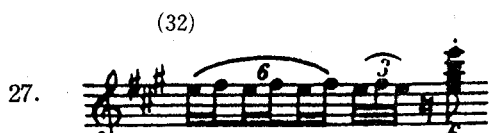
Schuster によれば、28小節をD音で開始し、32小節の最後には後打音を付けていないが、この奏法でよいと考える。

(28)

(*d* = 120)

26. 

(32)

27. 

第29番 変ロ長調 op. 106 《ハンマークラヴィーア》

作曲年1817~18 献呈 ルードルフ大公

全体が4楽章の構成から成り、ピアノ・ソナタ中最大の規模を持っている。このソナタは「ハンマークラヴィーア」と呼ばれている。

— I —


2分の2拍子。ソナタ形式、*ff*による第1主題が交響的な壮大さをもって開始される。また、楽章全体は、冒頭の動機が中心となって組み立てられ、素晴らしい効果を出している。

例. 11 (106~111)

(106)

(107)

(111)



大規模なソナタ形式。右手でトリルと旋律を同時に奏するようになっており、長いトリルが続く。

奏法

① Schuster による奏法 (トリル音の省略法は使用していない。)

(106)



② Budapest による奏法 (トリル音省略による奏法。)

(107)

(111)



のように、8分音符の6連音符としているが、少し遅い感じがする。

③ トーヴィによる奏法

106~111小節。「旋律が1オクターヴに上がることを除いて、にせのトリルの工夫はここでは不必要である。8分音符の3連音符はトリルとしては遅い、そして正確な16分音符はきらびやかであるがやや固い。半分のテンポで半小節に12個の音符(16分音符の3連音符)をさらいなさい。次のように、初めは主要音から出発するようにするが、あとでアクセントを上方の音符に移すがよい。20)」と次の奏法を示している。

(106)



④ Breitkopf による奏法) トリル音省略による奏法。)

(106)



(111)



111小節から主西音によるトリルとしているが、上方補助音からのトリルとしたい。従って次に示す Schirmer による奏法がよいと考える。

⑤ Schirmer による奏法 (トリル音省略による奏法。)

(106)

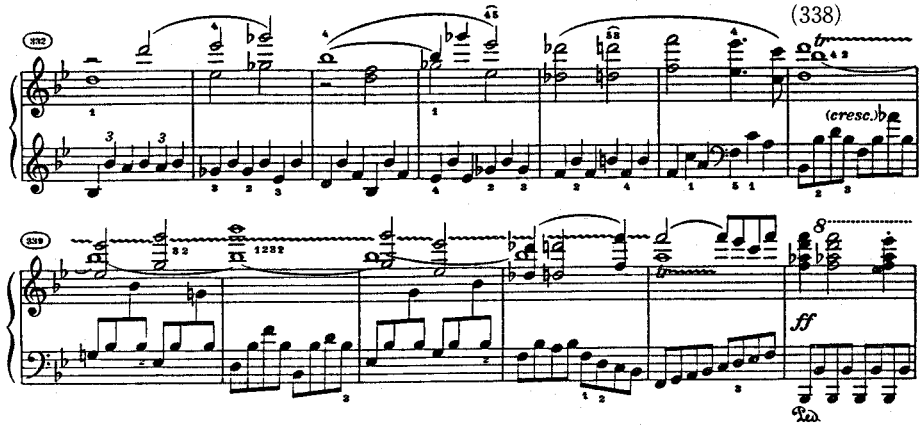


(111)



例・12

(338~343)



コーダに、右手オクターヴによる旋律と、トリルを同時に奏する技法をとり入れている。このコーダは、ピアノ・ソナタ最大の規模としては比較的短い。しかし、充実した技法は実に驚くべきものである。

奏法

① トーヴィによる奏法

トーヴィは、342~343小節について、次のように述べている。

「342小節のその音符に諸君の親指を固着させてしまっはいけない。それは安心して行かせてよい。

(342)



3連音符のトリルと一緒にひびく旋律的8分音符が明らかに不均等になるのは、気にしなくてもよい。それはこのパッセージをテンポにまで仕上げたときには、調整されるだろう。106~111小節におけるように、半分の速さで、トリルに2倍を数の音符を使いなさい²¹⁾。」

② Budapest による奏法 (トリル音省略による奏法)

8分音符による3連音符のトリルとしているがやや遅い感じ。

(339)

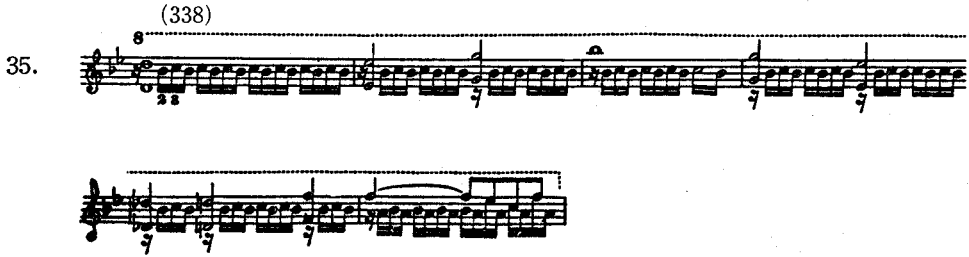


21) ベートーヴェン ピアノ・ソナタ集Ⅲ ハロルド・クラクストン編, ドナルド・フランス・トーヴィ 注解
山根銀二訳 全音楽譜 p.152



従って、次に示す Breitkopf による奏法がよいと考える。

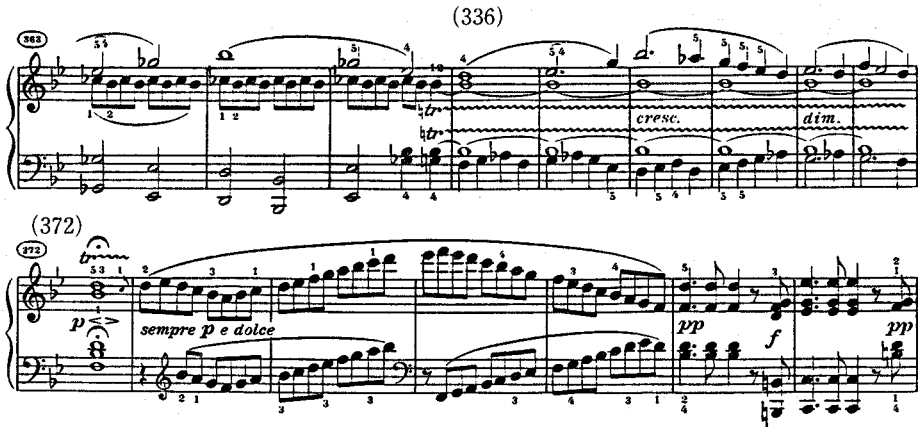
③ Breitkopf による奏法 (トリル音省略による奏法, なお, トリルは16分音符。)



Schirmer による奏法も同じ。

例・13

(335~372)

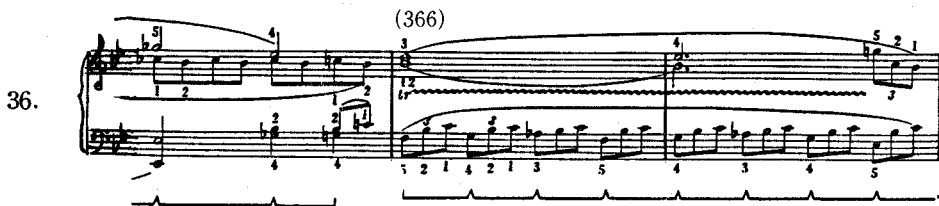


第3部, 終止におけるトリル

奏法

① Budapest による奏法 (トリル音省略による奏法。)

365小節4拍目を8分音符のトリルで開始し, 366小節から8分音符の3連音符によるトリルとしている。なお, 372小節のトリルを主要音開始としている。





② Schuster による奏法 (トリル音の省略法は使用していない。)

365小節4拍目を16分音符のトリルで開始し、366小節から8分音符の6連音符によるトリルとしている。また、372小節のトリルを主要音開始としている。

(336)



③ C. F. Peters による奏法 (トリル音の省略法は使用していない。)

365小節4拍目を8分音符のトリルで開始し、6連音符によるトリルに続く、なお、372小節のトリルを上方補助音開始としている。

(336)



④ トーヴィによる奏法 (トリル音の省略法は使用していない。)

トーヴィは、365~366小節について、次のように述べている。

「365小節でトリルは、右手は上の音で始め左手は下の音で始めて、両手の間に対立した形になるようにしなさい。」

(336)



365小節では、トリルは、練習のどの段階においても、8分音符の3連音符で始められる。そのあとで、前のパッセージでしたと同じ方法で練習しながら、諸君が半分の速度に適合させるだけの数におちつくことになる²²⁾。」

⑤ クロイツァー豊子による奏法 (トリル音の省略法は使用していない。)

芸術としてのピアノ奏法音楽之友社 p. 104の中で奏法を次のように示している。

22) ベートーヴェン ピアノ・ソナタ集Ⅲ ハロルド・クラクストン編、ドナルド・フランシス・トヴィ 注解
山根銀二訳 全音楽譜 p.152

(336)

40.



また、372小節については、主要音開始とし、次のようにしている。

(372)

41.



1小節半を16分音符で。

365～372小節におけるトリル奏法について、以上のように色々の弾き方が考えられるが、トリル主要音が先行していることと、旋律を明瞭に奏することを考え、Breitkopf による奏法がよいと考える。

⑥ Breitkopf による奏法 (トリル音省略による奏法。)

(336)

42.



Schirmer による奏法も同じ。

— IV —

主部に先立ち、4分の4拍子で10小節からなる序奏が、Largo によって即興風に開始される。主部は、Allegro risoluto 4分の3拍子で、390小節におよぶ大規模なフーガが幾分自由な形をとりまとめられている。

例. 14

(10)

主部に入るに先立っての序奏。全体に非常に細かい律動が用いられていて、即興風なものである。

奏法

この場合は、主要音のH音より開始し、最後のトリルC音に後打音を奏して終る。なお、クローツァー豊子は、「芸術としてのピアノ奏法」音楽之友社 p. 104の中で、「主要音からはじめ、リズムは不定」と述べている。

例. 15 (11~13)

(11)

Allegro risoluto (♩ = 144)

大規模な フーガ に先だつての導入にトリルが使用されている。

奏法

11~13小節、主要音より開始し、後打音は付加しない。

例. 16 (16)

(16)

Fuga a tre voci, con alcune licenze²³⁾

主題は、首頭部、反復進行、終結部、接続部の4つから成り、その首頭部にトリルが使用されている。また、この首頭部はいろいろに変化され展開されている。

(16)

43.

首頭部(A) 反復進行(B) 終結部(C)

24)

23) Henle 版に後打音を記しているトリル。16, 26, 35, 52, 111~112, 112~113, 113, 123~124, 124~125, 125~127, 158, 158~159, 216~217, 333 (右), 333 (左), 349~350, 351~352, 368~369, 372~380, 381, 382 (右), 382 (左), 383 (右), 383 (左), 392 (右), 392 (左), 396 (右), 396 (左), 396 (左) 以上の小節。

24) ベートーヴェン ピアノ・ソナタ 作曲学的研究 諸井三郎著 音楽之友社 p.353

奏法

16小節、主要音のC音より開始し、後打音を以て終る。




例・17 (48~52)

(48)

第1部最後の部分に、主題の首頭部が模倣的に展開されている。なお、Henle版では41~51小節までのトリルに後打音を付していない。しかし、ここではトリルが短2度上行して終わっていることを考え、後打音を加えて奏すべきである。

例・18 (111~121)

(112)

25) Budapest, Breitkopf, Schuster, Durand, Schirmer, Universal, K. R. Peters, C. F. Petersはいずれも後打音を記していない。(117~123, 175, 223~228, 314~316も同じ。) 177, 178, 179, 235 (注. Breitkopf ) 232~241, 294~295, 300~313, 367~368, 396~372の小節。Budapestのみ後打音を記している。(注. 361は )、176小節、Schusterのみ後打音を記している。174小節、Schuster, Budapest, C. F. Petersは後打音を記している。242小節、Budapest, Breitkopf, Schirmerは後打音を記している。286小節、Budapest C. F. Peters, (注. Breitkopfは )。)

注。以上は、Budapest, Breitkopf, Schuster, Durand, Schirmer, Universal, K. R. Peters, C. F. Petersによるもの。

第3部にあたる部分で、全体が独立した間奏になっていて、主題は一回も姿を見せない。
奏法

トリルは、例. 16と同様に主要音開始とする。(111~129小節) 但し、117~118, 118~119, 119~120, 120~121, 121~122, 122~123の小節は、音の進行から考え後打音は不要である。

111~112小節のトリル奏法は、トリル音省略する方法がよいと考える。

① Breitkopf による奏法 (トリル音省略による方法)

(112)

44.

(Schirmer も同じ奏法)

② Budapest による奏法 (トリル音省略による方法)

(112)

45.

例. 19 (168)

(168)

168.

26) Schuster, Budapestは、主要開始としている。(312, 313の小節, Schuster, Budapest, Universalは同じく主要音開始。)

第4部に属する部分で、主題の蟹行形が使用されている。

(153)

46. 

奏法

① Breitkopf による奏法

(168)

47. 

② Budapest による奏法

(168)

48. 

③ Schirmer による奏法 (トリル音省略による方法)

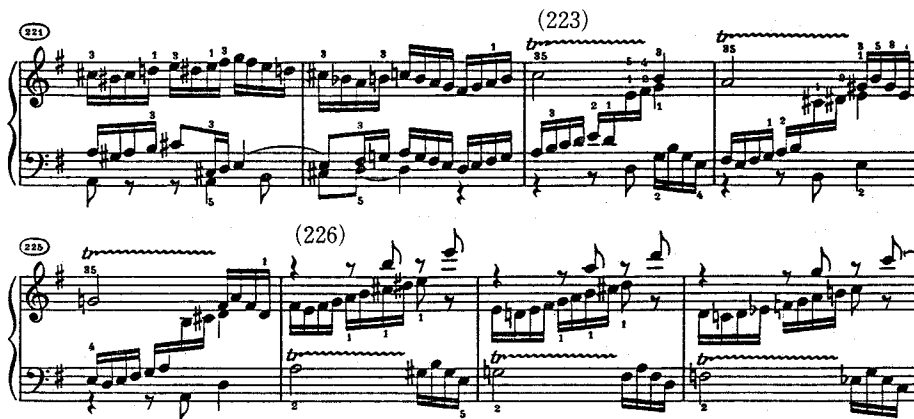
(168)

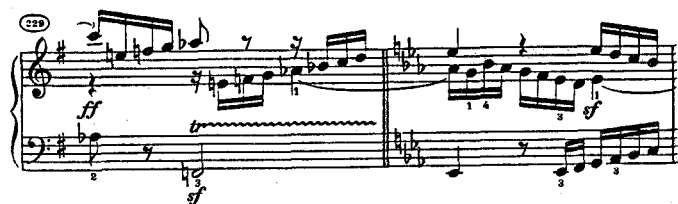
49. 

168小節、この場合はトリル音の省略による奏法をとらなくてもよいと考える。

例. 20

(223, 226)

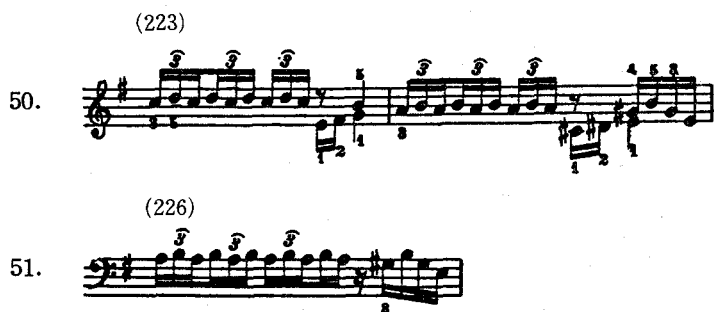




第5部では、反行形を用いた新しい方法によって展開されている。例・20に示されているトリルの部分にあたる小節は間奏にあたり、反復進行（B）および首頭部（A）のトリル素材が展開されている。

奏法

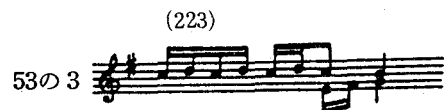
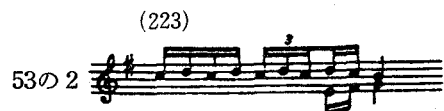
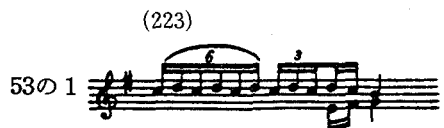
① Breitkopf による奏法



② Schirmer による奏法



③ Schuster による奏法（3種類の奏法を示している。）



①②③のいずれの奏法でもよい。

例. 21

(279, 182)

(279)

第7部は大フーガの終結部にあたり、その第1群に属する。高音に対旋律を奏しながらトリルが使用されている。この部分は原主題と対主題の組合せとなっている。

(279)

奏法

① Breitkopf による奏法

(279)

② Budapest による奏法

(279)

279小節、高音部の進行から考え、例. 20の奏法と同じくトリルの省略法をとらなくてもよい。

例. 22

(286)

(286)

第7部、第1群に属する。下声にオクターヴで対主題が力強く展開される。上声と中声とに反復進行(B)が模倣的に使用され、最後にはBのみの形となる。

奏法


① Breitkopf による奏法

(286)

57.  (Schirmer も同じ奏法)

② Budapest による奏法 (トリル音省略による方法)

(286)

58. 

286小節、トリル奏法の省略法を必要としない。

例. 23

(308~317)

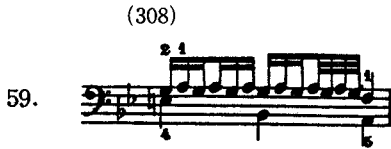
(308)



第7部, 第2群に属す。308~318小節は, トリルを含む首頭部(A)の素材と反復進行(B)の素材が主体となっている。この間奏は333小節まで続く。

奏法

① Breitkopf による奏法



② Budapest による奏法 (トリル音省略による方法)



308小節, Breitkopf による奏法でよいと考える。(注・後打音は必要なし。)

例. 24

(345)

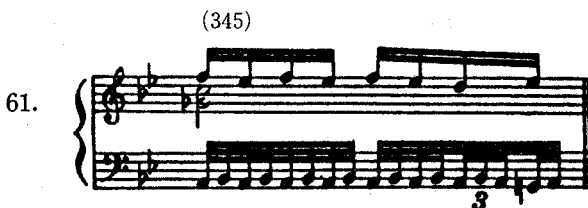


第7部, 第3群に属す。呈示部にあたる部分で, 主題出現の回数も多く5回現れる。それらはいずれも主題, あるいは応答の形をとっている。345小節は第2回目の最初の小節にあたる, この2回目は下声に主題の形をとって進行する。

奏法

① Schirmer による奏法

主要音開始で後打音を付しているが, 短2度上に進行しているのでよいと考える。



例. 25

(367~400)

(367)

(369)

(373)

(376)

(382) *Poco adagio*

dan - do

ri - tar - tar

Tempo I

29)

29) Breitkopf は上方補助音開始としている。Universal は主要音開始としている。

第8部367～400小節は楽章終止で、首頭部（A）のトリルがまず発展し、いろいろの素材が対立的に取り扱われている。381小節で一旦 Poco Adagio となり、384小節で再びもとの tempo にもどる。最後は ff の和音で力強く終る。

奏法

396～372, 372～380の小節におけるトリルは、主要音開始とする。

① Breitkopf による奏法

上に示す奏法でよいと考える。

② Budapest による奏法

特に指の短い人にはよい方法と考える。

以上フーガ (op. 106 IV) のトリルについて検討結果、若干の問題は残るに違いないが、次のようにまとめる。

- フーガに使用されているトリルは、例外なく主要音開始とする。
- 2度上行して終るトリルは、原則として後打音を奏する。
- 下行して終るトリルは、原則として後打音を使用しない。
- 旋律音を奏しながらのトリルについては、その状態によってトリル音省略による方法を使

用する。

- 注. 但し, 後打音の記してあるトリルはその指示に従う。(Henle 版参照のこと。)

文 献

- 1) 音楽事典 平凡社 昭和32年3月(初版第1刷)
- 2) 標準音楽辞典 音楽之友社 昭和41年4月(第1版)
- 3) 音楽大事典 平凡社 1983年8月(初版第1刷)
- 4) 名曲事典 千蔵八郎著 音楽之友社 昭和46年5月(第1刷)
- 5) 名曲解説全集 音楽之友社 昭和56年1月(第1刷)
- 6) 名曲解説事典 音楽之友社 昭和27年1月(初版)
- 7) ベートーヴェンピアノ・ソナタ 作曲学的研究 諸井三郎著 音楽之友社 昭和40年5月(第1刷)
- 8) ベートーヴェンのピアノ・ソナタ 園田高弘=諸井誠・共著 音楽之友社 昭和46年9月(第1刷)
- 9) ベートーヴェンのピアノ作品 伊藤義雄 音楽之友社 昭和37年5月(第1刷)
- 10) 装飾音 レオニード・クロイツァー著 中瀬古和訳 大化書房 昭和23年1月(印刷)
- 11) 芸術としてのピアノ演奏 レオニード・クロイツァー著 クロイツァー豊子=村上紀子共訳
- 12) 楽式論 石桁眞禮生著 音楽之友社 昭和25年5月(初版)
- 13) ベートーヴェン書簡選集上 小松雄一郎訳編
- 14) ベートーヴェンピアノ・ソナタ演奏法と解釈 パウル・バドゥーラ=スコダ 高辻和義・岡村梨影共訳
- 15) ベートーヴェン生涯篇 属啓成 音楽之友社 昭和38年9月20(第1刷)
楽譜
- 16) ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン ソナタ「熱情」へ短調 op. 57 自筆草稿初版本 フェクシミリ 属啓成監修 音楽之友社
- 17) ベートーヴェンピアノ・ソナタ集 I, II, ハロルド・クラクストン編 ドナルド・フランシス・トヴィ, 注解 山根銀二訳 全音楽出版社
- 18) ベートーヴェンピアノ・ソナタ集 I, II, III, 春秋社
- 19) Simon and Schuster, New York
- 20) G. Schirmer, New York
- 21) Kultura, Budapest
- 22) Breitkopf & Härtel, Wiesbaden, Leipzig
- 32) Henle Verlag, München
- 24) The Associated Board of the Royal Schools of Music, London
- 25) Universal Edition, Wien, London
- 26) G. Ricordi & C., Milano, München
- 27) Editions Durand & Cie., Paris
- 28) Edition Peters, Leipzig, Frankfurt, London, New York